

天神さまとテンマサマ—天満宮の男根形—

増田公寧¹⁾

Tenjin & Tenma—Phalli dedicated to Tenmangu shrine—

Kimiyasu MASUTA

Key Word: 性神、天神、テンマ、山の神

はじめに

寛政七(1795)年3月、菅江真澄は狩場沢を訪れ次のように記している。「狩場沢のせき屋にいたる。みな、むかし通りける道なれど、見奉らざる菅大神の祠とて、さゝやかなる、めをのはじめの石、雷斧石、雷槌石など云ふ、ことなる石どもををさめたり。」(狩場沢のせきやに来た。みな、むかしとおった道であるが、そのおり拝まなかった菅大神の小さな祠に、陰陽石、雷斧石、雷槌石などという変わった形の石がおさめてあった。) 2)『菅江真澄遊覧記』(東洋文庫)の注釈によれば、文中の「菅大神の祠」とは菅原道真を祀る祠であるとされる 3)。「めをのはじめの石」とは、おそらく男女の性的な象徴を想起させるような形の石のことであろう。また、「雷斧石」や「雷槌石」というのは、ある種の考古遺物が出土したときに、過去の人々がそれらの遺物を解釈し、表現する方法のひとつとして知られている。すなわち、それらの石は雷様の道具であるというのである。

これら「めをのはじめの石」や「雷斧石」などが、他の石とは異なる特徴を持った石であることから特別視され、偶然、「菅大神の祠」に納められたのかもしれない。経緯はわからないし、それらの石に対する人々の心意も今となっては確かめるすべはない。仮に偶然でないとすれば、どのような関連性が考えられるだろうか。

菅原道真と雷との関係については一般に知られている。菅原道真が延喜元(901)年、太宰権帥に左遷され、同三(903)年に憤死した後、京では天災が頻発し、ついには清涼殿に落雷して藤原清貴や平希世らが死亡するという事件が起こった。また、藤原時平や源光ら道真を讒訴によって左遷せしめた人々が次々に死亡するという事も起こった。菅原道真は御霊・雷神として恐れられ、その慰撫のために「天満大自在天神」として神殿に奉祀され、崇められるようになったといわれる。(後に北野の地に祀られたのは、同地に古来からある天神社が雷神を祀っていたことによるものである。)このような意味で、雷にまつわる石が「菅大神の祠」に納められていることに必然性を認めることは不可能でない。

「めをのはじめの石」についてはどうだろうか。天満宮の祭神としての菅原道真は、とりわけ平安時代末期以降には、学問、文章、詩歌等の神としての色彩が強く、これに性的な神体を祭るあるいは性的な奉納物を奉納することは、一般的でないと思われる。ところが本県では、天満宮に性的象徴が奉納されたり神体として祀られる事例がみられるようである。天満宮と性的象徴との間に、単なる偶然ではない何らかの関連性があるとすれば、どのような理由が考えられるだろうか。本稿では県内の事例をもとにその理由を探してみたい。

(1)天満宮での男根奉納

上北郡東北町 A 集落にある A 天満宮は部落のオオヤである A 家が管理する神社である。当主の A 氏によると、A 家の祖先は七戸城主に仕え藩境警護にあたった役人で、死後にその役人を神として祀ったのが「キンセイ石」と呼ばれる石であると言われているという。「キンセイ石」は、天満宮の社殿の前にあり、くぼみが多数ある大きな石体に太い棒状の石が複数立てかけられている。子宝、とりわけ男の子を授けてくれる神として信仰され、参拝者はこの太い棒状の石を家に持ち帰って祈願することもあるという。A 氏はこの話を祖父から聞いたという 4)。

近隣住民のとらえ方は少し異なっている。藤崎町から嫁いだ婦人 B 氏によると、社殿の前にある石は「コーヘンサマ」であり、学問の神であると聞いたことはあるが、実際には何の神様であるかわからずに拝んでいるという。また、安産や子宝を祈願する場合には「狩場沢」(平内町狩場沢の C 宮)のことで、同所では男根を祀っている)にお参りに行くという。集落在住の婦人 5 名によると、何の神様かは知らないが「天神さま」といって、集落では4月と9

1) 青森県立郷土館 研究員 (〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14)

月の25日や年末、二百十日にお金を出し合ってお祭りをしているという。これらのことから、付近の住民にとっては、天神様としての信仰はあっても、産育に関わる神としての認識は薄いようである⁵⁾。

しかしながら、天満宮に祀られる石は「キンセイ石」(A氏)「コーヘンサマ」(住民)と呼ばれており、呼称からは、一般的に男性の性的象徴を神体としたり奉納物としてそれらを捧げ祀る習俗がみられる「コンセイサマ」と呼ばれる民俗神との関連が思い起こされる。また、その細長い形態からも、この石が男性の性的象徴を表現していると考えすることは不可能ではない。この石が子宝に御利益があるとするA氏の話や、太く長い石を、くぼみの多数ある石に立てかけるという祭祀の状況からも、これが古くから「コーヘンサマ」「キンセイ石」と呼び習わされてきたものかはともかく、性的象徴を象ったものであると考えることは可能である。ちなみに、『東北町史』ではこの石を「子宝や縁結びに御利益がある金精石」としている⁶⁾。天満宮にこの石が祀られたのか、石を祀っているところに天満宮があとから祀られたのか、その経緯や両者の関係を示すものは残存しないため不明である。これを本稿のテーマに適合する事例のひとつとして捉えることは難しい側面もあるが、天満宮において現在も性的な象徴と思われるものが祭祀されている一例として、視野に入れておきたい。

また、『十和田市史』によると、天満宮として信仰されている社祠のなかには、往々にして石棒(男根型奉納物)を神体として祀っているものがあるとされる⁷⁾。

(2)天満宮に祀られる山の神

ところで、県内の天満宮において、性的象徴が奉納される場合があるということとともに、他にも特徴的な事実がある。天満宮に山の神を祀る社祠がみられるのである。『七戸町史』によれば、天保七(1836)年の『七戸惣郷村口附』という文書には「和田村 天満宮社 観音林アリ」にと記されており、名称は「天満宮」でありながら、地元の人々は「天神様ではなく山の神様を祀っている」と述べているという⁸⁾。他にも各所に類似の事例がある。以下にそれらの事例を記す。

D 天満宮(上北郡)

(※Dは地名、以下E・Fについても同じ)

神体は菅原道真公の座像で、神体の背後に納められた木札には「若宮明神 天照大神 天満宮 山神社 長谷稲荷」(傍点筆者)と記されているという。⁹⁾

E 天満宮(上北郡)

侵害は、菅原道真の座像で、農神様(稲荷神)、山の神(大山祇神)も合祀しており、御神体の背後には「山之神」「農神」と墨書きされた2枚の木札が納められている。¹⁰⁾

F 天満宮(上北郡)

3体の神体が安置されており、菅原道真公の座像を中央に、右に山神の立像、左に不動明王像が祀られている。脇侍の山神は長い髪を垂らした女神で、右手に柄の長い鉞を、左手には経巻を持つ。¹¹⁾

天満大自在天神(八戸市)

よく手入れされた杉の木立の中に、2間四方の小屋があり、その中に笠付きの石碑がある。中央には「天満大自在天神」と刻まれ、裏面には「昭和二十六年七月二十五日 G(個人名)五十八歳建之」とある。この社祠のある山林に隣接する会社に勤務する男性によると、「何かはわからないが、学問の神だと聞いて」おり、8月25日が例祭日で、近くの鷹巣部落の人々が祀っているという。この社祠は集落から外れた人家のまったくない山中に祀られており、当初から「学問の神」としての信仰があったものかは不明である。¹²⁾ 高木達氏の『八戸市内社祠一覧』によると、この社が『はちのへ町内風土記』(デーリー東北社刊, 1968)に記された「てんま山上」の天満宮でないかという。

天満宮(八戸市)

個人(H氏)宅の敷地内北西角の小山に数本の木が茂っており、頂に小さな祠がある。H氏によると、テンマサマを祀っており、勉強の神様であると聞いているという¹³⁾。祠の内部に石祠が納められており、奉納物には「大自在天神」「□□(文字不明)天神宮」等の記載がみられる。また、奉納日は1月3日、正月3日等で、奉納者は別当Hとなっていた。¹⁴⁾

天満宮大神、十二山の神、八幡大神（八戸市）

社殿の正面には「八幡大神 十二山ノ神 天満宮大神」の扁額があり、奉納物には「天満宮自在天神」「十二山ノ神」と記されている。また、「十二山ノ神」については奉納日を「12月12日」「3月8日」とするものがあり、古い鳥居の中央部の木材と思われる部材には「10月12日」の記載があった。また、「天満宮自在天神」については「3月8日」に奉納されていた。15)。

天満宮（八戸市）

「天満宮の山ノ神は女の神さまだと聞いている。山ノ神の石（高さ14センチ、幅20センチ、奥行22センチの饅頭形）はいつから神社に祀られたかは分からない。ただ、過去帳を見れば享保年間（1716-1736：原文は漢数字）から名が出てくる。地域の人ばかりでなく、遠くからも占いに来っていたようだ。石の座る布団は、拝みに来る人が持って来てどんどん高くなった。石には布帯が鉢巻のように結ばれているが、古くから拝みに来ている人がこうさせている。布帯が古くなると拝みに来る人が取り替えてくれているようだ。（後略）（昭和6年生まれ・女）」16)

以上のように、県内では、天満宮に「山の神」が合祀されていたり、あるいは天満宮と呼ばれながら実際は「山の神」を祀っている社祠が散見される。これは、天満宮に性的象徴が祭祀される事例とともに特徴的な事例である。

ところで、県内には「テンマ」（テンマサマ、オデンマサマ）と呼ばれる神を祀る社祠がみられる。この神は「山の神」として信仰される一面を持っている。理由は後述するが、天満宮と山の神との関係を考える上で考慮すべき神であると思われる。

(3)テンマという神について

「テンマサマ」あるいは「オデンマサマ」などと呼ばれ、青森県内の南部地方で広く信仰される神である。この神はコンセイ、ニワタリ、ホウリョウ、ウンナン、ランバなどと同様、中世以前の古い時代から信仰されてきたと思われる民俗神のひとつであり、その性格については不明な部分が多い。『御領分社堂』には、この神を祀っているのではないと思われる社祠、あるいは場所についての記載が10件みられ、別表の通りである17)。

田代村	宮古御代官所	天摩明神社	式尺四面板葺 俗別当 庄之助
小鳥谷村	沼宮内通御代官所	天摩社	社地斗有之 俗別当 太郎右衛門
田子村	三戸通御代官所	天満林	祭神 天満自在天神 俗別当 弥兵衛 右之通申唱、林ニ杉三本有之斗御社も無御座候、鎮座慶長年中ト申伝候
田子村	三戸通御代官所	天満林	祭神天満自在天神 俗別当 孫次郎 古来より林斗ニて堂無御座候
田子村	三戸通御代官所	天満林	二尺四面板ふき 俗別当 長左衛門 祭神天満自在天神、鎮座ハ慶長年中ト申伝候
田子村	三戸通御代官所	天満林	二尺四面板ふき 俗別当 彦七 祭神天満自在天神 鎮座慶長年中ト申伝候
田屋村之青平	田名部通御代官所	天魔	三尺四面板ふき 俗別当 平助
猿ヶ森村	田名部通御代官所	天魔堂	林斗ニて堂無之 俗別当 佐兵衛
野牛村	田名部通御代官所	天魔堂	俗別当 弥太郎
尻屋村	田名部通御代官所	天魔	三尺四面板ふき 俗別当 勘之丞

次に、現在確認することができる県下の事例について挙げる。

オデンマサマ（七戸町）

七戸町のI家では、丸みを帯びた重さ4kgほどの石を「オデンマサマ」として祀っている。毎月7日が縁日で、ハタに「天摩」の文字が書かれているという。ゴンゲンサマをともに祀っている。18)

天間天神（上北町）

病気の神として祀られ、高さ40cmの天間天神と刻まれた石碑があるという。そしてこの神は、沢の上方に祀られているという。「テンマ」とは特定の地形をさすことばであるとされる。19)

おてんまさま（東北町）

山の神として信仰されるオテンマサマの祠があり、霊験あらたかな神として信仰されている。山の栗の木を伐採したため“たたり事件”があったとされる。20)

天間神社（東北町）

山の神神社の隣に天間神社があり、祭神は山の神神社の妻といわれる。J氏（個人）が昭和3年旧9月12日に御神体として石を納めたという木札があるという。21)

オデンマサマ（新郷村）

K集落にある天間神社では「オデンマサマ」を祀る。縁日は6月13日で、集落の人によれば「オデンマサマ」は、女神である、子どもの神様である、京都から来た神様である、とされる。また、「習字箱のようなものを持った神様」であり、もともとは別の場所に祀られていたという22)。

オテンマサマ（田子町）

「山神社」に、山の神とされる女神とともに「オテンマサマ」が祀られている。オテンマサマは、山の神の親神であるとされている。女性はこの神社に行くことを禁じられ、鳥居の手前で拜んで帰ったという23)。

天満宮（倉石村）

L集落の天満宮は菅原道真を祀っている。伝承では助之丞という人がL集落へ移住する際に、以前から守護神として祀っていた神を移転先に祀ったのが始まりであり、この神を祀った場所は現在も天満屋敷と呼ばれ、「L沢の沢頭に近い所」であったという24)。

天満小祠（東通村）

東通村大字Mの天神林の岩の上に、天満小祠があり、2月24日と9月24日が縁日であるという25)。

天摩林の山の神（東通村）

東通村大字Nには山神を祀る場所が2箇所あり、いずれも現存しないが、その一方は「天摩林の中に鎮座していた」といわれる。昭和33年に防衛庁の試験場建設に伴いN八幡宮に合祀され、天文十(1541)年の棟札は「東通村で2番目に古い札」とされ、平成4年に「天魔の札」として村の有形民俗文化財に指定されている26)。

天麻（東通村）

東通村大字Oの八幡宮境内には五つの小祠があり、それぞれに牛頭天王、馬頭観音、龍神、妙見とともに「テンマ」が祀られているという。東通村史では、これを「天麻（天満）」と表記し、菅原道真を祭神とする天神信仰について述べた項目で取り上げている。そしてこの「天麻」は「天神さま」であるとしている27)。

天摩堂（八戸市）

『大館村誌』によれば、オテンマサマの祠があり、大きな長方形の石皿が一枚、昭和14～15年頃まで祠のなかに安置されていたという。また、この祠の前は下馬しなければ通れなかったという話が残っているとされる28)。

天満宮（八戸市）

『大館村誌』に「天保二年に大泉院の十四世黙禪甚堂の修した棟札には『天満自在天神』とあったこれで天満宮になったらしいが、石橋のテンマの後大工P（原文：個人名）が三五年前に重ねて夢を見るので造立したのがゴンゲンサマ、これが『秋葉山』の再建だったらしい。（中略）年に二回その家々から供物を持って来て祀ってみた。祭日を六月十五日としてゐるのはももとの産土神牛頭天王、八坂神社を忘れてしまひながらのその日であらうし、十二月十二日はテンマ山の神を山の神の十二日としたものらしく天満宮との混雑が見られてゐた。」29)と記されている。同所で天満宮を祀るP氏（大正15年生まれ）によると、毎年6月25日と12月24日が例祭で学問の神を祀っているとのことであった30)。なお、先に取り上げた「天摩堂」と上記の「石橋のテンマ」との関係は不明である。

テンマサマ（八戸市）

八戸市のQ集落では、テンマサマを産土神として祀っており、このテンマサマはえんぶりの烏帽子が嫌いなので、Q

集落ではえんぶりが行われなかったという³¹⁾。

以上の事例についてまとめると、

- ・「オテンマサマ」「オテンマサマ」「オデンマサマ」と呼ばれる。
- ・「天摩」「天間」「天魔」「天間」「天麻」等の字があてられる。
- ・「山の神」「山の神の妻」「山の神の親神」とされ、性は女性であると説明される場合が複数例みられる。
- ・ときに産の神や病の神として信仰される場合もある。
- ・「たたり」をもたらすとされる場合もある。
- ・水場の頂上台地や沢の上方（沢頭）、山の頂、林地などに祀られる場合が多い。

留意すべきは、山の神として信仰されているということと、テンマという神の名前が、テンマン（天満）と発音の上で類似しているということである。推測の域を出ない話ではあるが、天満宮に山の神が祀られる事例は、山の神としてのテンマが、いつしかテンマンとの音韻上の類似から、天満神として祀られるようになったものなのではないだろうか。より積極的な表現をするならば、天満宮に祀られる山の神には、本来テンマ神であったものもあるのではないだろうか。

『六戸町史』は、「山の神を女神としてとらえた場合、てんま神との間に山の神は一二人の子を産んだという話があり、いつしかこれに基づきてんま神を天満宮と習合し、天神さまにも山の神を祀るようになった」とし、前出の F 天満宮において菅原道真公の脇侍として山の神の女神像が祀られるのはその具体例であるとしている³²⁾。テンマと山の神が夫婦であるという伝承があるにしても、そこから「天神さま」（菅原道真）と「山の神」がペアとして祀られるようになったと解釈する根拠はどのようなものか示されていない。夫婦説を出すまでもなく、「山の神」としてそこに祀られている神こそがじつはテンマであるという可能性もある。その辺の事情は個々のケースにより異なるであろう。

(4)テンマサマへの男根奉納

ところで、テンマに対して性的奉納物（男根形）が奉納・祭祀される事例がみられる。『十和田市史』によれば、「三八地方のテンマ様には例外なく金精様が奉納されている」（傍点筆者）と述べられている³³⁾。この場合、「金精様が奉納されている」というのは、「男根形奉納物が奉納されている」という意味なのであろう。男根形を奉納する理由は明らかでないが、先に明らかになったように、テンマという神がしばしば「女神」であり「山の神」と捉えられていることからすれば、男根形が奉納される理由は、「山の神」に対する類似の習俗との関連を考えることも可能かもしれない。テンマに対して男根形が奉納される県内の事例を次に記す。

天間宮大明神（奉納物：男根状の石）八戸市

二間四方のお堂の中に祠があって、その中には高さ18cm、直径16.5cmの男根状の石が奉納されている。エンツコに入った手作りの人形が複数奉納されており、産育に関わる信仰もみれるようである。奉納物を見ると、「天間宮」「天満大明神」「天間宮大明神」等の記述が見られ、古いもので昭和18年、新しいもので昭和49年の奉納物がみられる。また、奉納日は、旧2月2日、旧4月2日、旧9月2日、新1月15日と様々であるが、「2日」であるものが多く見られる。隣接する小さな祠は崩壊しかけており、祠内部の中央に自然石の塊が置かれ、脇にも石が奉納されている。なかには長めの形をしたものもあり、性的象徴との関連を想起させられる。

神社の隣に住む昭和24年生まれの人 R 氏によると、付近の学校の元校長であった人から「学問の神だから大切にしなさい」と言われたという。また神社の隣の畑の所有者である昭和18年生まれの人 S 氏によると、馬頭観音であり、馬の神であるという。人それぞれに解釈が異なっており、何の神を祀っているのかは不明となりつつあるようであった³⁴⁾。

テンマサマ（奉納物：石棒）南部町

『南部町史』によれば、南部町相内の「テンマサマ」も『産の神』として婦人の信仰をあつめており、社殿の周辺に多数の石棒があって、昭和初期までは出産の際に石棒を自宅へ持ち帰り、倍返する習慣があったといわれる。ここには山の神とテンマサマが祀ってあり、夫婦であるといわれているという³⁵⁾。

秋葉山神社（奉納物：木製男根）八戸市

S 集落と T 集落の境に秋葉山神社があり、年 2 回の祭日のうち、いっぽうの祭日を 1 2 月 1 2 日としていることから、テンマサマを祀っていたらしいことが『大館村誌』に記されている³⁶⁾。獅子頭 2 体とともに祭壇に長さ 4 0 センチほどの木製男根が奉納されている³⁷⁾。

オデンマサマ（奉納物：木製男根）東通村

下北郡東通村 U 集落には「オデンマサマ」を祀る祠がある。菅江真澄が寛政 5 年 1 1 月 2 7 日に訪れ、「青平に着たり。……又天魔神といふ祠に、をばしがたにたぐふ石をあまたならべたり。宝永のころをさめたる札に、佐藤次郎とかいたる名ども、いまし世の人とも見えず。」（傍点筆者）と記している³⁸⁾ように、古くは男根形を奉納する風習が見られたようである。

U 落会代表 V 氏によると、「W さんが亡くなってから、祀る人がいなくなり、W 家（屋号をインキョと呼んだ）はむつ市へ引越してしまった。W 家は、X 家の隣にある空き地にあった。テンマサマのお堂も荒れるにまかせていたものを、10 年ほど前に御神体のゴンゲンサマ（獅子頭）を熊野神社の本殿に遷した」とのことで、御神体の獅子頭は顔一面に虫食いの穴があいた状態ではあるが、現在は熊野神社本殿に安置されている³⁹⁾。この獅子頭は「隠居様」と称されかつては「天魔堂」に祀られており⁴⁰⁾、祭礼は 9 月 1 7 日に行われていたという⁴¹⁾。また、この神が『シディジのオデンマサマ』と呼ばれる山神⁴²⁾であるという⁴²⁾。

集落に住む老人でもこの祠の存在を知る人はもはや少なく、大正 5 年生まれの Y 氏によると、「オデンマサマと呼んでいた。オデンマサマという名前ばかりで、何の神様が全く関心がなかったので、詳しいことはわからない。」というし、Z 商店経営の老女 2 名も、テンマサマという名前すら聞いたことがないとのことであった。小祠のあった場所は、a 家に隣接する崖下の台地に位置するが、現在では完全に朽ち果て、見る影もない状態である。残骸に混じって天保六年の棟札に「天魔」の文字が記されていたが、それだけが、この祠がテンマサマを祀ったものであるということを示す唯一のものであった⁴³⁾。

参考までに、九重京司氏が昭和 5 0 年代に出版した『につぼんの性神』によると、氏が同所を訪れた時にはすでに男根形は失われ、唯一、祠の前に女性器を思わせる二股状の樹木が奉納されていたという⁴⁴⁾。

まとめ

以上から、天満宮に男根が奉納される事由について、次のような経緯を考えることができるのではないだろうか。

①(4)でみたように、テンマに対して、男根を奉納する習俗が古くからあった。

②その中で、(2)(3)でみたように、本来はテンマを祀る社祠でありながら、のちに天満宮とされた（「テンマン」と「テンマ」の混同）。

③そして、(1)の事例のように、天満宮となったのちも男根を奉納する習俗が残った。

天神とテンマは信仰の内容や対象の類似からではなく、単に音韻的な類似（テンマとテンマン）によって、両者が混同・習合したのではないだろうか。関西でも天満は、テンマンと発音せずにテンマと呼ばれる。テンマンがテンマと発音の上で縮まることは考えられることである。そして、天満（天神）と音韻上の類似から混同されたテンマに対し、「山の神」としてのテンマに対する男根奉納の習俗が受け継がれたのではないだろうか。

テンマの信仰に天満（天神）の信仰が習合したのか、その逆かは、事例ごとに異なることも考えられるが、テンマは土着の民俗神であることから考えると、古くからあったテンマの信仰に、中央から伝播してきた天神信仰が習合したと考えるのが自然であろう。ただ、その経過についての詳細は不明である。いわゆる「天神さま」は平安時代末期に学問の神としての崇拝が始まり、その後時代が下るにつれ、さまざまな要素が加わりながら大衆に流布し信仰も拡大していくが、それに伴って、従来は自然神としての天神を祀っていた社祠が、菅原道真を祭神としたというケースも多いといわれる。テンマがいつしかテンマンと習合し、場合によっては崇拝の対象が変化し忘れ去られたのちも、男根奉納の習俗は受け継がれたことにより、今なお天満宮において性的象徴の奉納が行われるケースがみられるのではないだろうか。このことは、諸自治体誌において、これまで漠然と指摘されてきたことではあるが、事例をあつめ、検討してみるとあらためて肯われるのである。ただ、冒頭に挙げた菅原道真の紀行文中の例や、上清水目天満宮の例については、これに当てはまるということでは決してない。あくまで、可能性のある事例として例示したものである。

おわりに

テンマという神について積極的に論じている文献はほとんどないようであるが、テンマという名称については（神名としてではなく地名との関連において）述べられているものがみられる。

柳田國男は『山島民譚集』のなかでテンバ（サンカ、オゲ）と呼ばれる人々について触れ、青森県の「天間館を始めテンマ屋敷など」云ふ処々の地名は恐らくは此連中で、テンマは天魔でもあるまい。天婆とでも書くのであらう。以前は信仰生活と交渉を有して居たらしい証跡がある。」と述べており、テンマの地名はこれらの人々と関係があるのではないかと述べている⁴⁵⁾。また、能田多代子は『青森県五戸方言集』に「テンバ」の項を設け、「箕などを作ったサンカのこと」と記し、それとは別に「テンマ」の項には、「丘陵地帯の一区画にまある地形。テンゴとも。崩れやすい地質。」としていて、特定の地形や地質を示すことば（方言）として「テンマ」という語があることを示している⁴⁶⁾。特定の地形とテンマという語の関連に言及している市町村誌は複数あり、たとえば『十和田市史』では「谷の上部へ上りつめた所、山の中に入り込んだ谷」「頂上、頂上の地面」など「明らかに一つの地形の呼称である」としている⁴⁷⁾。『七戸町史』では「民俗学においても、後が山、前が谷という地形をテンマと呼ぶことが、関係者に明らかにされている」との記述がある⁴⁸⁾。また、『上北町史』においても、「テンマは『谷の上部へ上りつめた所、山の中に入り込んだ谷』というように、地形の名として使われている」との記述があり⁴⁹⁾、『東北町史』においては、「『てんま』とは天間のことで、山の中に入り込んだ谷を指しており、地形的な面から命名されている」としている⁵⁰⁾。このように、テンマという語については、特定の地形や「サンカ」を指すことばとの関係が示唆されているが、テンマという「神」とテンマという「語」との関係については明らかにされていない。本稿の(3)で述べたように、水場の頂上台地や沢の上方、山の頂などにテンマが祀られる場合が多いことも確かであり、祭祀される場所との関連からすれば興味深いことではあるが、必ずしもそのような条件にあてはまる事例ばかりではない。特定の地形を指すことば、またはある種の生活様式を持つ人々を指すことばとしてのテンマと、民俗神としてのテンマとの関連の有無については今後の検討課題のひとつである⁵¹⁾。

実地調査をしてみると、自治体誌や民俗誌に取り上げられていない事例がまだ多くあることが予想された。今回扱ったテンマ信仰の事例は青森県域のものに限られており、この信仰が本県においては下北・南部地方に偏った分布を示すことは明らかであるが、近隣諸県については不明である。更なる調査と事例の分析が必要である。

なお、テンマを祭祀する社祠で、神体を獅子頭（権現）によって表象しているものが複数みられる⁵²⁾。また、テンマ神が祀られる場所はいずれも館のそばであるという『藤坂村誌』の指摘もある⁵³⁾。これらのこともまた興味深い。

注意) 本文中の個人名および集落名、地名を冠する社祠名については、本稿がインターネット上で不特定多数に向けて公開されることを考慮し、アルファベットに置き換えた。その際、出現順に大文字 ABC …小文字 abc …とした。なお、社祠や個人に対する取材はすべて私的におこなったものである。

謝辞

八戸市内の小規模な社祠を訪問・確認するにあたっては、高木達氏がまとめられた『八戸市内社祠一覧』が大変参考となった。資料に記載された社祠の総数は430余にもものぼり、すべて高木氏の地道な調査に基づいている。貴重な資料を提供して下さった氏に感謝申し上げます。

注)

2) 菅江真澄『津可呂の奥』（内田武志、宮本常一編『菅江真澄全集』第三巻、未来社、1972、p.11）なお、（ ）内の現代語訳は内田武志、宮本常一編『菅江真澄遊覧記』3、平凡社、2000、p.146による。

なお、「むかし通りける道なれど」というのは、この7年前、天明八(1788)年7月6日に狩場沢を訪れた時のこと指している。『そとかはまつたひ』に「かくて狩場沢のやかたになりて関手とりつ。……村はしに、おはしかたなせる石を、ほぐらにひめて祀る。しかたぐひの、みちのおくにはいと多し。」（菅江真澄『卒土か浜つたひ』（内田武志宮本常一編『菅江真澄全集』第一巻、未来社、1971、p.454）（旅を続けてきて、狩場沢の部落に入って、関手を問屋でもらった。……村はずれの祠に男根の形をした石をまつっている。このようなものは陸奥にはたいそう多い。）現在、狩場沢（東津軽郡平内町）にある熊野宮では男根形を祀っているが、文中に登場する「おはしかたなせる石」との関連は不明である。また、「おはしかたなせる石」と「めをのはじめの石」との関係の有無も不詳である。

- 3)内田武志、宮本常一編『菅江真澄遊覧記』3, 平凡社, 2000, p. 146
- 4)2012年11月5日調査。なお『上北町史』では「清水目家の四代目新之助清長が幼少のころ、津軽藩士によって寝込みを襲われ、一家は惨殺されたが、清長だけが生き延び、代を継いでいったという。そして、この清長が天満宮を建立したのだという。また、このような事件は清長以前の初代清春から三代目清次の代にも起こっていることから、清長は、二度と津軽勢が入り込まぬように荒ぶる天神を奉祭したのだと思われる」と述べられている。また、清水目集落の共同墓地の記念碑には、約400年前に初代清水目清治が七戸隼人正時公の命により清水目に住居を移したのが、この集落の始まりであると記されているという。(東北町史編纂委員会編『東北町史』下巻Ⅱ, 1994, 151-155)
- 5)2008年11月29日調査
- 6)東北町史編纂委員会編『東北町史』下巻Ⅱ, 1994, 151-155及び295-296
- 7)十和田市史編纂委員会編『十和田市史』下巻, 1976, p. 713-714
- 8)七戸町史刊行委員会編『七戸町史』一, 1982, p. 394
- 9)六戸町史編纂委員会編『六戸町史』上巻, 1993, p. 253
- 10)六戸町史編纂委員会編『六戸町史』上巻, 1993, p. 263-271
- 11)六戸町史編纂委員会編『六戸町史』上巻, 1993, p. 318-319
- 12)2012年11月6日調査
- 13)高木達『八戸市内社祠一覽』私家版, 2003
- 14)2012年11月6日調査
- 15)2012年11月6日調査
- 16)櫻庭俊美「青森の民俗～庶民の暮らしとところ～」第68回「石占(5)」(一般財団法人青森地域社会研究所発行・月刊「れちおん青森」2009. 11月号, p. 28)
- 17)「テンマ」神についてみれば、記載される10件のうち、地名から推して現在の青森県に所在していたと考えられるものは8件である。重複も考えられるこの少数のデータから述べるのは余りにも根拠に薄い、この神に対する信仰の分布が現在の青森県域に偏っていたことが想像される。それは、『御領分社堂』で取り上げられている他の神々をみたとき、テンマ神ほど青森県東部地域に偏って分布している民俗神は他にはないということからも肯われる。

	総数	青森県域	割合(%)
テンマ	10	8	80
ホウリョウ	28	15	54
ウンナン	16	0	0
ニワタリ	5	0	0
ランバ	4	0	0
コンセイ	4	0	0
サイノカミ	11	4	36

- 18)七戸町史刊行委員会編『七戸町史』一, 1982, p. 394及び414-415
- 19)『上北町史』下巻、上北町史編纂委員会編, 1987, p. 1214
- 20)東北町史編纂委員会編『東北町史』下巻Ⅱ, 1994, p. 336-337
- 21)東北町史編纂委員会編『東北町史』下巻Ⅱ, 1994, p. 337
- 22)弘前大学人文学部民俗学研究室『新郷の民俗—青森県三戸郡新郷村—弘前大学人文学部民俗学実習調査報告書Ⅲ』2011, p. 197
- 23)小井田幸哉編『田子町史』下巻, 1983, p. 842
- 24)倉石村史編纂委員会編『倉石村史』下巻, 1991, p. 550
- 25)東通村史編纂委員会編『東通村史』民俗・民俗芸能編, 1997, p. 285
- 26)東通村史編纂委員会編『東通村史』民俗・民俗芸能編, 1997, p. 271
- 27)東通村史編纂委員会編『東通村史』民俗・民俗芸能編, 1997, p. 285
- 28)小井川潤次郎『大館村誌』復刻版, 国書刊行会, 1982, p. 78
- 29)小井川潤次郎『大館村誌』復刻版, 国書刊行会, 1982, p. 149
- 30)2012年11月6日調査
- 31)小井川潤次郎『大館村誌』復刻版, 国書刊行会, 1982, p. 245
- 32)六戸町史編纂委員会編『六戸町史』上巻, 1993, p. 318
- 33)十和田市史編纂委員会編『十和田市史』下巻, 1976, p. 713-714
- 34)2012年11月6日調査
- 35)南部町史編纂委員会編『南部町史』下巻, 1995, p. 216
- 36)小井川潤次郎『大館村誌』復刻版, 国書刊行会, 1982, p. 149
- 37)2009年10月11日調査
- 38)菅江真澄『をふちのまき』(内田武志宮本常一編『菅江真澄全集』第二巻, 未来社, 1972, p. 405)
- 39)2007年5月20日調査

- 40) 東通村史編纂委員会編『東通村史』民俗・民俗芸能編, 1997, p. 270
- 41) 東通村教育委員会発行『青森県下北郡東通村民俗調査報告書（第一集）東通村入口・上田屋・蒲野沢』1980, p. 75
- 42) 東通村史編纂委員会編『東通村史』民俗・民俗芸能編, 1997, p. 270
- 43) 2007年4月30日調査
- 44) 九重京司『につぼんの性神』けいせい出版, 1981, p. 37
- 45) 柳田國男『山島民譚集』（『柳田國男全集』第二卷, 筑摩書房, 1997, p. 553）
- 46) 能田多代子『青森県五戸方言集』復刻版, 国書刊行会, 1982
- 47) 十和田市史編纂委員会編『十和田市史』下巻, 1976, p. 713-714
- 48) 七戸町史刊行委員会編『七戸町史』一, 1982, p. 414-415
- 49) 上北町史編纂委員会編『上北町史』, 1987, 下巻, p1214
- 50) 東北町史編纂委員会編『東北町史』下巻Ⅱ, 1994, p. 336-337
- 51) 県内の自治体誌や民俗関係の書籍のなかで、テンマという地名とテンマという神との関係について積極的に考察しているものは殆んど探し出すことができなかった。唯一、『田子町誌』では、町内の「天間屋敷」という地名について、テンマサマを祀っている場所や家がないか「尋ねたが、どこにも現存はない」（小井田幸哉編『田子町史』下巻, 1983, p. 844）と一言述べているが、地名と神名の関係の有無については言及していない。
- 52) 下北郡東通村田屋および八戸市妙秋葉山神社。
- 53) 川合勇太郎編『藤坂村誌』, 1939, p. 102

